「銘記される献身」について

イーシャ・サーデサイ

シッダ・ヨーガの道における祝祭は、崇拝と同義語です。グルの崇拝、神の崇拝、人生に意味と質感と善良さをもたらすものの崇拝です。今年のバーバ・ムクターナンダの太陰暦の誕生日に、グルマーイは私に、祝祭はまるで「銘記される献身」のように感じると話しました。私はこの表現の詩のような優美さと的確さに驚嘆しました。なぜなら、もし「銘記される献身」でなければ実際、崇拝とは何でしょうか。もし、私たちの心の繊細な内面にあるものを表現するための美しい手段、整然として神聖な構造を持つものでなければ、崇拝とは何でしょうか。

もし私たちがささげる崇拝を――私たちが贈る敬意、払う尊敬を――献身の神殿として考えるなら、バーバの太陰暦の誕生日のシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムでは、そのような神殿が数多く見られました。朝、グルマーイはバガヴァーン・ニッテャーナンダ・テンプルで崇拝をささげました。私はグルマーイが歩いて来た時に、ちょうどテンプルのすぐ外にいました。グルマーイは私を見て、「一緒に来て、私がバガヴァーン・ニッテャーナンダに崇拝をささげる間、手伝ってください」と言いました。私は返事をするのをためらいませんでした（「はい、グルマーイ！」）。それは、聞くにはあまりにも幸せな命令でした。

テンプルに入ると、グルマーイはバデ・バーバの台座をオレンジがかった黄色いバラ――火と太陽の色だと、彼女は私に話しました――で飾り、バデ・バーバのパードゥカーを伝統的なささげ物（ビャクダン、米、ターメリック、クムクム、香油）で清めました。グルマーイの差し伸べた手のひらからパードゥカーに降り注がれる米粒の音はほとんど音楽的で、クスの油の芳香は強く、陶然とさせるものでした。それから、グルマーイは「ジョータ・セー・ジョータ・ジャガーオー」

を歌いました。私も一緒に歌い、グルマーイは炎がともされたアーラティー・ランプをバデ・バーバの前で揺らしました。

テンプルから出る時に、グルマーイは窓の外を見て、私の注意を空に促しました。澄み切った青空で、雲は柔らかくうねっていました。グルマーイは、テンプル上空の大きな塊の雲を指さしました——それは完璧なハートの形をしていて、日の光を受けて白く輝いていました。シッダ・ヨーガの祝祭日には、何度もそのようなこと——その行事をたたえる自然のしるし——を目にすると、グルマーイは私に話しました。私にとって、この自然からの反応、私たちがすでにたたえ祝っていることへの承認は、まるで香りそのものに香りを加えること、美しさにさらなる美しさを添えること、最初からとても素晴らしいものの素晴らしさをさらに強めることです。

この日、グルマーイがハートの雲を見た時に、写真担当者が通路を通りかかったのは幸運でした。そうしてグルマーイが見たものを記録することができました。グルマーイはたびたび、「もし私がテンプルでサッツァングをしたり、バガヴァーン・ニッチャーナンダにささげものをしている時は、必ず写真担当者が外に控えているべきです。自然や天はいつもその輝かしさを現したがっていますから」と言っています。

それからグルマーイは、どうやら雨がやって来るようだと言いました。グルマーイがそう言った時、「私には空はとっても青く見えるんですけど！」と思ったのを覚えています。真昼の太陽は頭上で輝いていました。私は雲により暗くなる兆しがあるかと探しましたが、何も見つけられませんでした。それでも、グルマーイが雨が来ると言ったのだから、何かがあるに違いないと私は思いました。

その夕方、バーバの誕生日を祝って、アーシュラムにいる皆がサッツァングのためにバガヴァーン・ニッチャーナンダ・テンプルに集まりました——特に、「アーラティー」を歌って、感謝と崇拝をささげるためです。グルマーイは常々、バガヴァーン・ニッチャーナンダ・テンプルを訪

れることは彼女にとって非常に特別なことで、なぜなら、バーバは自分のグルに計り知れない愛を持ち、バーバが 1981 年にこのテンプルを建てたのはバガヴァーン・ニッテャーナンダをたたえるためだったのだから、と言っています。ですから、テンプルを訪れることは、バーバをたたえることでもあるのです。

この誕生日の夕方、テンプルは光で満たされました。五つのアーラティーのランプがバデ・バーバへ揺らされ、それぞれが前のランプよりも多くの段、多くの炎になっているのが特徴でした。この日に「アーラティー」を歌うことには特別な意味がありました。なぜなら、自分のグルを崇拝するために「アーラティー」の詩節を集め、さらにその一部を書いたのはバーバだったからです。太鼓が鳴り響き、炎が舞い、コーラスが空気を満たしました。

「アーラティー」が終わってすぐ、このサッツァングの司会者であるスワーミ・イーシュワラーナンダが、バガヴァーン・ニッテャーナンダのダルシャンを受け取るよう皆を招きました。話していた時、彼は窓の方をちらりと見て、突然の著しい天候の変化に気づきました。雨、あるいは恐らく嵐さえもが、もうすぐ来るように見えたのです。皆がスワーミ・ジの視線を追いました。実際、少し前まで晴れていた空が暗くなってきていました。雲が上空に集まってきていました。

そして、スワーミ・ジが席に着き、人々がダルシャンのために進み出始めた時、それは起こったのです。雷がとどろきました。稲妻が空を走り抜け、土砂降りの雨が降り注ぎ、そして風はそれを強く押して、雨を波のように振動させました。アーシュラムの敷地内の木々が前後に揺さぶられていました。それはまるで、インドのモンスーンの一場面のようでした。

15 分か 20 分か――全員がバデ・バーバのダルシャンに進み出るまでにかかった時間――の間、雨はそのように降り注ぎました。そして、あっさりと、雨はやみました。天は水の恵みを回収しました。空は晴れ、太陽は戻り、湿った大地から雨上がり特有のかすかな芳香が漂いました。この日の崇拝が、受け入れられたのでした。

このページでは、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムでのバーバの太陰暦の誕生日について私が今説明した幾つかの記録を、写真で見ることができます。グルマーイが見たハート形の雲、そして雨の中のテンプル。グルマーイがアーシュラムの敷地で出合った花々や、彼女が愛情を込めて聖油で清めたバデ・バーバのパードゥカー。どの画像にも、グルマーイの言葉の真実が見え、感じられます。献身が銘記されているのです。

© 2021 SYDA Foundation®.著作権所有。